



年頭あいさつ

大学の未来を憂う

理事長 岸本 忠三

第243号

公益社団法人
医学振興会
銀杏会

(編集同人)

- 俊太郎 俊典 長子
- 原正雅 和尚 幸
- 萩米武朝 黒馬 場
- 也人 央啓 正一
- 越守 田村 英一
- 裕田 杉上 木森

新年明けましておめでと
うございます。学友会の先生方
には良き年をお迎えのこと
と思います。昨年の年頭の挨拶
にも書きましたが、一昨年に
続いて昨年も日本の研究者が
二人ノーベル賞を受賞されま
した。21世紀に入って自然科
学分野におけるノーベル賞の
受賞者の数は英・独・仏を抜
いて日本は米国につぐ2位に
なりました。日本に科学技術
分野が如何に高い評価をうけ
ているかということを示す事
実だと思います。

新年明けましておめでと
うございます。学友会の先生方
には良き年をお迎えのこと
と思います。昨年の年頭の挨拶
にも書きましたが、一昨年に
続いて昨年も日本の研究者が
二人ノーベル賞を受賞されま
した。21世紀に入って自然科
学分野におけるノーベル賞の
受賞者の数は英・独・仏を抜
いて日本は米国につぐ2位に
なりました。日本に科学技術
分野が如何に高い評価をうけ
ているかということを示す事
実だと思います。

新年明けましておめでと
うございます。学友会の先生方
には良き年をお迎えのこと
と思います。昨年の年頭の挨拶
にも書きましたが、一昨年に
続いて昨年も日本の研究者が
二人ノーベル賞を受賞されま
した。21世紀に入って自然科
学分野におけるノーベル賞の
受賞者の数は英・独・仏を抜
いて日本は米国につぐ2位に
なりました。日本に科学技術
分野が如何に高い評価をうけ
ているかということを示す事
実だと思います。

化等大学を企業のガバナンス
とおなじようにしようという
愚策、そして最終的に大学の
文系学部は縮小化等々日本が
世界から尊敬される最も大切
な部分を弱める方向に進みつ
つあることに危惧を感じま
す。

新年早々後期高齢者の繰り
言のようなことを云いました
が、我が大阪大学医学部はこ
のようなあやまりに左右され
ることもなく大道を歩み発展
していくことを祈りたいと思
います。

画題 和歌山城と桜



和歌山市の中央、小高い伏虎山にそびえる和歌山城は、私には子供の頃の遊び場の一つでした。70年前の大空襲で木々も真っ赤に焼けおちましたが、知らぬ間に普通に樹齢を重ねた楠の大木が緑に茂っています。先日久しぶりに裏参道から一気に登ると息切れし85歳を実感させられました。桜の季節が一番賑わいますが、静かな青葉・紅葉の頃も美しく、再び描きに訪れようと思ひながら私の秘密のベスト・ビューポイント?をあとにしました。

谷澤 修 (昭31)

第27回シンポジウム

地域医療の課題とその対策

平成27年度の医学振興銀杏会主催のシンポジウムは、10月2日(金)銀杏会館の阪急三和ホールにて開催された。大阪大学医学部附属病院の各関連病院代表といった方々が多数参加された。

定刻に開会。早石雅有副理事長(昭42)の司会で岸本忠三理事長(昭39)が開会の辞を述べた。

続いて、澤芳樹医学系研究科長(昭55)が挨拶、野口眞三郎副病院長(昭55)が阪大病院の現状を報告した。続いて、この1年間に医学部に就任した新教授、猪阪善隆先生(昭63)から挨拶があった。



講演 澤 芳樹先生



コーディネーター
荻原俊男先生

阪大名誉教授)をコーディネートした。

ネーターとして、澤芳樹先生(昭55・医学部長、阪大教授心臓血管外科)による基調講演が行われた。その後、コメンテーターとして、西田幸二先生(昭63、阪大教授 眼科学)、茂松茂人先生(昭53・大阪医大、大阪府医師会副会長)、吉岡敏治先生(昭46、大阪府立急性期・総合医療センター 院長)によるコメンテーター発言および参加者デイスカッションが行われ



コメンテーター
西田幸二先生

澤先生の基調講演要旨は、下記のとおりである。
新しい先進医療を展開し、ノベーションに結びつけるために、大阪大学では、14年前から附属病院に未来医療センターを、3年前からは未来医療開発部として新たな展開を進めており、大きな成果を上げつつある。実際に、これまでに橋渡し研究として50件以上の臨床研究や医師主導治験



コメンテーター
茂松茂人先生

を支援し、企業治験数も200件を超えている。さらに人材育成により100人を超える人材を育成し雇用を創出してきた。今後もこれまでの成果を活かし、トランスレーショナルリサーチによる先進医療の推進などを通じて、地域医療の活性化や最終受け入れ病院として地域の病院との連携を図っていくことが、大阪大学附属病院のはたす地域医療における役割と考える。この流れを弾みに医学系研究



コメンテーター
吉岡敏治先生

科では、教育におけるグローバル化とともに明日の未来医療を支える新しい医療人の人材育成や明日の未来医療につながる基礎医学の発展と、新たな大阪市内における拠点を確保していく。医学伝承150周年創立90周年を迎え、実学を重んじ自由闊達な学風と未来を見通す先見性をもち「Challenging, Sustainable」として「Toughな大阪大学医学系研究科/医学部」のさらなる発展に取り組みでいきな

早石雅有(昭42)

次期代議員選挙について

次期代議員候補となった会員の氏名や選挙の詳細については同封別紙をご覧ください。

<平成27年度 秋 叙勲と受賞>

瑞宝中綬章	渕端 孟先生(昭35・阪大歯)
瑞宝中綬章	泉 太先生(昭39)
紫綬褒章	狩野方伸先生(昭57・東医歯大)
日本対がん協会賞	今岡真義先生(昭40)
日本医師会最高優功賞	金澤豊純先生(昭32・大阪医大)
日本医師会優功賞	清野佳紀先生(昭40)
日本医師会優功賞	児玉浩子先生(昭45)
日本医師会優功賞	茂松茂人先生(昭53・大阪医大)
日本医師会医学賞	磯 博康先生(昭57・筑波大医)
日本医師会医学賞	岩井一宏先生(昭60・京大医)

<寄附御礼>

当会の公益目的事業へご寄附をいただき、誠に有難うございました。
平成27年10月19日
会員ご家族様より、3万円をご寄附頂きました。

※公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会への
ご寄附は、個人・法人とも税金控除の対象となります。
詳細に関しては、当会事務局までお問い合わせください。

医学部長通信 第4回 澤 芳樹 (昭55)

「阪大医学部が発信する医療イノベーション」

一つ屋根の下で産学連携を推進し、迅速に安全に医療技術が患者に届くような体制を推進するために、最先端医療イノベーションセンターが2014年春に設立された。これによって、基礎研究から臨床応用、さらに治験、そして企業への導出が円滑に行える体制が整った。折しも、政府は大型プロジェクト予算の一元化を図り、基礎シーズの社会への還元を一気通貫に可能にする体制構築をめざしている。現在の大阪大学医学系研究科はまさにこれを実現できる理想のシステムを完備できたと言える。これから本格的に動き出すイノベーション棟が、既存の研究組織と有機的な連携をとることによって、医療を飛躍的に前進させる画期的なシーズの開発とその国際的な実用化が進むことを大いに期待していただきたい。

一方、これまでの橋渡し研究や治験等の活動実績が高く評価された結果、本年7月に、全国で東北大学、国立がん研究センターとともに、附属病院が医療法上の臨床研究中核病院に認定された。これは質の高い臨床研究や医師主導治験の中心的役割を担う病院として、厚生労働大臣が認可するもので、名称独占が許される。これまで築いてきた精度の高い臨床研究を自らすすめる橋渡し事業者としての基盤をさらに揺るぎないものにし、アカデミア発の新規医療技術の開発を推進していくプラットフォームとして、今後果たしていくべき役割と期待は大きい。

これらの流れを弾みに医学系研究科では、教育におけるグローバル化とともに明日の未来医療を支える新しい医療人の人材育成や明日の未来医療につながる基礎医学の発展と、長期に安定した財政の確保を進めている。大阪大学医学部において、グローバル化の中で国際交流やゲノム解析研究を一層推進するとともに、財政的に安定し、より一層基礎研究レベルを向上させノーベル賞学者が誕生するような大阪大学医学部を発展させることができるように、各テーマで実践から研究/教育まで医学部から附属病院へとつながる統括的横断的組織としてイニシアティブを構築しようと考えており、まず強化すべき内容から産学連携イニシアティブ、国際医療イニシアティブ、そしてゲノム解析 Bioinformatics イニシアティブの創設をすすめている。また、医学部教育、修士課程、博士課程のいずれにおいても Professionalism と Globalism を養う教育改革を行っている。そのような中、医学伝承 150 周年を迎え、実学を重んじ自由闊達な学風と未来を見通す先見性をもって、「Challenging, Sustainable そして Tough な大阪大学医学系研究科/医学部」のさらなる発展に取り組んでいきたい。

トピックス

肝炎の治療

C型肝炎ウイルスは1989年に発見された一本鎖(プラス鎖)のRNAウイルスです。分子生物学的な手法を用いて同定された初めてのウイルスだと言われています。これにより9,600塩基からなるゲノム構造は確定されたのですが、創薬のスクリーニングができる培養細胞系の確立は1999年まで待たねばなりませんでした。幸いウイルス発見以前から存在したインターフェロンとリビリンが臨床的に効果があることが示され、これらの薬剤を用いて1992年から抗ウイルス治療が行われてきました。2000年代に入り、C型肝炎ウイルスに選択的に抗ウイルス活性を示す薬剤(DAA, direct-acting antivirals)の臨床開発が加速しました。創薬治療の標的になったのは、ウイルスの増殖に必須のNS3/4Aプロテ

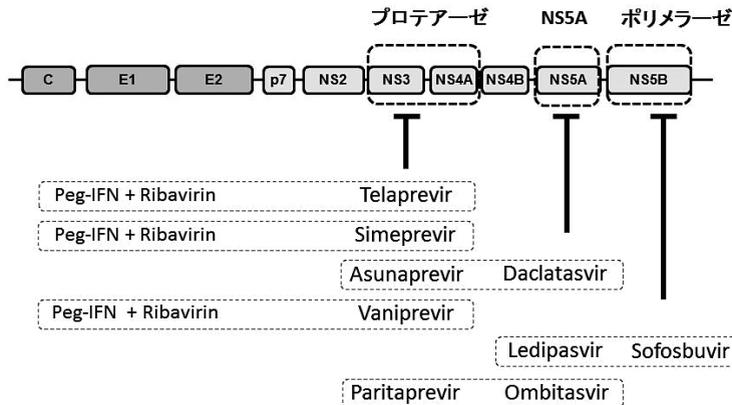
アーゼ、NS5A複製複合体、NS5Bポリメラーゼです。これらの薬剤は単独投与では、早期に耐性ウイルスが出現し臨床的に限界がありました。そこで、その他の抗ウイルス薬—インターフェロンやリビリンなどの非選択的薬剤あるいは他のクラスのDAA—と併用するという戦略がとられました。現在は、複数の薬剤を組み合わせることで、ゲノタイプ1型、ゲノタイプ2型のいずれのウイルスに対しても、12週間の服用で95%超のウイルス排除(SVR, sustained virologic response)を達成することが可能です。DAA治療の時代に入り、新たにいくつかの問題がクローズアップされてきました。ひとつは耐性ウイルスの問題です。インターフェロンやリビリンなどの非選択的抗ウイルス薬の時代では、「耐性」ということを考慮する必要はありませんでした。しかし、選択的な作用機序の薬剤が出てくると、治療が非奏功になった時にはその薬剤に対して耐性を示す変異ウイ

ルスが出現します。創薬のターゲットが上述の3箇所に限られているため、あるクラスDAAに耐性が生じると、その後の再治療の選択肢が制限されます。もう一つはSVR後の肝臓の問題です。従来、SVR後の肝臓は5年累積で3%程度でした。しかし、DAA治療の時代になり、以前は抗ウイルス治療の適応外と考えられていた高齢者や線維化進展例からSVRが得られる時代になっています。このような患者層は発癌リスクが高く、SVRが得られてもその後の発癌はこれまで以上の頻度で発生すると考えられています。「感染症としての治癒が必ずしも肝疾患の治療を意味しない」という事実が、より顕在化してくることに注意する必要があるといえます。

消化器内科学

竹原徹郎(昭59)

C型肝炎ウイルスのゲノム構造とDAA



Host-Targeting Antivirals

Direct-Acting Antivirals

提

言

る。産婦人科医はまじめな小児科医から「5歳以下の小児死亡は3000人もないのに何をやっているのか?」と叱られている。日本は今だに中絶天国なのだろうか?

日本社会の人口減少が止まらない。1970年代すでに特殊合計出生率が2.1を切ったにもかかわらず無策で来たので当然である。この数年、大阪府でも毎年1000人(小学校30クラス分!)の出生が減り続けている。このような中で日本全国では年間18万件の人工妊娠中絶が行われてい

ア、スエーデンなどは少し高い。ロシアやキューバは60%を超え、飛び抜けて高い。中絶の自由度を上げたり、近代的避妊法(ピルなど)の普及率を上げてこの率は変わら

少子化と人工妊娠中絶

だいた。先生としては熊楠の同級生に京都府立医大を創設した中川小十郎の名があることに興味を持っていたとのことだが、私が熊楠ファンであることを知ってコピーを送ってくれたのである。熊楠は、すでに8歳頃から、庄屋さん

ヘルスケア達成目標の1つに掲げている。女性が意図せず妊娠してしまい、その妊娠を「なかった事」にするのは古来ヒトの業(ごう)である。

その業を認めなければ、自らの命を落とすか、嬰兒殺し、虐待などで犯罪者にされる女性が増えるだけである。日本ではこの問題の議論を避けたため、先進国で当然とされる若年貧困層の中絶後避妊に関する社会的支援も行われていない。

である。日本は明らかに成熟社会に入っている。女性の出生率を1.8に上げる、という目標が掲げられたが、成果は個々人の意志によつてのみ可能である。若者がカップルを作り、子供を持つことが幸せと思う事ができるような妊娠出産育児に対する包括的支援強化以外に達成の見通しはない。ネット社会で見られる生硬な決めつけを避け、倫理道徳だけでなく幅広く柔軟に社会の現実を見ることが必要である。

木村 正(昭60)



...その144

南方熊楠の成績表

南方熊楠はNatureに50篇の論文が掲載され、自分の脳機能の解明を後世に託して、解剖を遺言するという(阪大に保存)明治、大正、昭和初期に生きた私の出身地田辺が誇る偉人である。2、3年前、京都府立医大名誉教授の中川雅夫先生からその熊楠が通っていた東京大学予備門明治18年度の成績表のコピーをいた

が所有していた太平記や百五巻もの和漢三才図会などの百科事典をそらんじて家に帰るとの記憶で正確に写し取ったというエピソードなどから神童や毘沙門天の申し子であるといわれたほどの天才である反面、学校はあまり好きでな

く、授業には熱を入れなかった。和歌山中学に入学してからも勉強には力を入れず、それでも「私は無事に卒業してみせる」と公言してはばかりず、果たしてその通りになった。その理由は当時の和歌山中学では、全科目総点数の5

彼の成績を見ると平均点は熊楠の65・6点よりはるか上の70・0点を取りながら、代数が30点だったためにこの年落第している。正岡子規はその後、もう一度落第したが、退学することなしに6年かかって卒業し、東大に入学した。予備門での熊楠は少なくとも初めの1年は、学校の方針に合わせるべく懸命の努力をしているさまがこの成績表から伺えるが、一方では当時激しい頭痛の頻発に悩まされるとい

次回は、独立行政法人地域医療機能推進機構大阪病院名誉院長 清野佳紀先生(昭40)にお願いました。住友病院 院長 松澤佑次(昭41)

植物の採集に取組むことが出

分の一をとれば落第とならないという大らかなもので、熊楠としては得意の作文と漢文で満点をとれば後の8科目は白紙でもよかつたから、普通の勉強に時間を費やすことなく、好きな読書や写本、動物の採集に取組むことが出

に従ったことが推察される。因みに、同級生に正岡常規(後子規)の名前も見られるが

ある。翌年の成績では平均65

診療科 紹介

小児外科

小児外科は新生児(胎児)から16歳までの患者さんを対象とし、多彩な疾患・手術に対応することが求められます。限られたマンパワーですが、何より子ども達の元気な笑顔を励みに、日々臨床・研究・教育に医局員一同力をあわせて取り組んでいます。

次は腎臓内科の猪阪善隆先生にお願致します。

奥山宏臣(昭59)

本教室のルーツは、昭和27年、わが国小児外科のパイオニアである植田隆先生のヒルシンスブルグ病の手術に始まります。昭和35年には食道閉鎖症手術においてわが国最初の成功を収めました。その後、旧第一外科から診療科として独立したのは昭和57年で、平成元年に正式の講座としてスタートしました。岡田正教授、福澤正洋教授に続き、昨年7月に私が3代目教授として教室を引き継いでおります。岡田教授は、米国より中心静脈栄養を導入した中心メンバーでしたので、当教室では発足当時より外科栄養を得意分野としてきました。種々の輸液製剤や微量元素製剤、カテーテル管理など、今では当たり前に行っている中心静脈栄養システムの確立に携わってきました。小児外科特有の分野としては、胆道疾患

や新生児外科に始まり、福澤教授時代には悪性腫瘍や臓器移植の分野が加わり、小児外科の全ての分野をカバーする診療・研究体制が整いました。平成26年の手術件数は479件、肝移植11件、内視鏡外科手術80件でした。これからは社会のニーズにもあわせ、低侵襲手術や再生医療にも積極的に取り組んでいきたいと思っております。

本教室の主な診療、研究教育の分野を紹介致します。

(栄養) 短腸症を含めた消化管機能不全の在宅中心静脈栄養患者を長期フォローしています。近年では、STEP手術という腸管延長術により短腸症児の中心静脈からの離脱を図っています。薬剤部の協力により中心静脈栄養患者へのセレン製剤やFeフリー製剤を他施設に先駆けて提供しています。

(臓器移植) 平成10年に始まった肝移植手術が今年100例を越えました。多くの診療部門のご協力のもと、5年生生存率92%と優れた成績を挙げることができるようになりました。小腸移植はまだ1例の実施にとどまりますが、現在移植待機中の患者さんもおられ、準備体制は整っています。

(悪性腫瘍) 小児悪性腫瘍の診療に当たっては、手術だけでなく化学療法、放射線療法などの集学的治療が必要で、小児腫瘍検討会を毎月開催して、関連各部門の緊密な連携に努めています。基礎研究分野では、癌幹細胞マーカーや免疫療法の開発にも取り組んでいます。

(低侵襲手術) 鼠径ヘルニアや虫垂炎といった日常よく見かける疾患から、横隔膜ヘルニアや肺切除といった疾患に

対しても内視鏡外科手術を積極的にを行っています。昨年より鼠径ヘルニアなどに対する日帰り手術も開始しました。

(小児救急) 豊中市・吹田市・池田市・箕面市・豊能町・能勢町をカバーする「豊能広域こども急病センター」の後送病院として、小児外科2次救急を全面的に受け入れていきます。

(胎児診断治療) 10月より産科、小児科、小児外科が中心となって胎児診断治療センターが発足しました。出生後の治療を円滑に進めるためには、胎児を一人の患者さんともみなす新たな診療体制が必要となります。胎児疾患の診断や治療に関わるすべての診療部門が連携し、よりよい治療を提供することを目指しています。

(教育) 若い人の外科離れが続く昨今、何より外科に興味を持ってもらえるよう、医学部生や研修医の教育に取り組んでいます。新しい試みとして、グローバルな視野に立って小児外科の重要性を考えも



うらえるよう、ゲストスピーカーを迎えて「小児外科と国際貢献」という4年生の臨床講義を今年から始めました。